

---

# 春風

森山KOUSEI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春風

### 【Zコード】

Z5804C

### 【作者名】

森山KOUSUKE

### 【あらすじ】

ある理由により別れた男女と下校途中で会話する男女。  
交わる事のない二人が最終的に交わる。大樹と公園によつて……

「ふざけんなよー。」

怒号と険悪な表情は私に向かられていて、冷静に少し悲しそうに傍観している私。憤りを感じている人と演技をしている人との対立は悲哀そのものだ。でも後悔はない。私が決めた事だから。別れ話を切り出したのは私。好きじゃなくなつたといつ身勝手な嘘をついた。彼が怒つてしまつのも当然。彼は最後に力無く、

「もついいよ…………わかつた…………」

そう告げた。全てを諦めたような達觀した寂しく悲しい顔をしていた。そんな顔を見た時に痛みが走つた。ドア閉める前に色々な物や痕が回想させ、逡巡せよつとする。やっぱり好きなんだなという思いを改めて感じさせる。吐露してしまつ感情を必死に抑えながらドアを閉めた。

締め切つたドアとともに溜まつていた感情は溢れ出して流れだした。でも決して声を出してはいけないし、押し殺さなければいけない。

三月に入つたけど、季節はまだ寒々しい。もつ戻れないと思案して私は廊下を歩いて行く。寒々しい温度は私の心情と一緒に。

廊下を歩く度に溜め息と悲観する自分がいる。

都会の私立中学に行きたかった。でも中学受験に失敗してそのままこの公立中学に入学。電車か、近くに住む祖母の家で生活して

行くつもりだつたのに……

都会で育つた僕は父親の転勤で小学五年生の時にこの辺鄙な田舎に移り住んだ。それ以来ずっとここに住んでいる。最初は全然馴染めなかつた。

でも、中学生になり葵と仲良くなり、それから周りとも話せるようになつて、馴染んでいった。牧野葵はガリ勉の眼鏡女で一番最初に顔を合わせた瞬間に指差して驚かれた。その様相に僕が突つ込むと「……何でもない」と言つた。第一印象としていいイメージではなかつたし、彼女はやたら世話を焼いたり、話しかけたりして最初は適当に相槌をうつたりしていた。でも段々ウザくなつてきて、

「ほつといてくれない！正直お節介なんだけど！」

すると彼女はうつむいて悲しい表情をした。言つた翌日から頭に残り、結局彼女に謝つた。「でも私が……悪いよね」彼女はそう告げた。仲直りをして、それから何となくだが仲良くなつていつた。

引き戸を開けると、各グループが集まりあつて、騒々しい声が聞こえる。

友人の池内慶太が僕を見た瞬間に手招きした。僕がそこに行くと肩を組み、人から見えないように十八歳未満は見れないDVDを僕に見せ、ニヤリと笑い。

「お前に貸してやるよ」

その顔を見た瞬間に（たのんでねーよ）と心の中で呟いた。こういう事ばかりしてくる僕の友人である。呆れ顔のまま、僕は葵の席を見ると空席になつていた。

「あれ！？葵は？」

「まだ来ない」

慶太をそう言つと「それより…」とロボットの解説をしようとして僕はそれを避け、自分の席へと向かい、座つた。（早く来るあいつが珍しい）と思案しながら、葵の影響で先週図書館で借りた文庫本を読み始めた。二ページ目ぐらいになつて睡眠不足がたたつたのか、睡魔に襲われ、そのまま机にうつ伏せ状態になつていく。その時に、場所は浮かばないが、葵が言つた言葉を回想していた。何故だか分からぬけど、

言葉が脳内に伝わりやがて意識を失つた。

病院の休憩所、口の字型のソファーに彼女は悲哀に満ちた感情で外の景色を眺めていた。彼は億劫そうに緊張しながら彼女に声をかけた。

「お姉さん珈琲とかいりませんか？」

急に声をかけられて彼女は驚きながら振り向くと、そこには小学校高学年ぐらいの男の子が缶コーヒーを持って立つていた。クールな表情をしているが、緊張感を隠しきれてなく、可愛らしい。そんな少年に対して彼女は口を開いた。

「ありがとうございます。どうして、私に珈琲を渡してくれるの？」

彼は困惑の表情を浮かべ、固まつた。彼女は予想した通りの反応で可笑しかつた。

「いや……その……お姉さんが悲しそうな顔してるから、声かけてみたんだ。」

彼女が笑っている時に彼が困惑と照れくわさを混在させた表情で予想していなかつた言葉を発した。彼が話しあがらうに母親が子どもを呼ぶ声が聞こえた。

「慎吾何してるの？」

彼は咄嗟に振り向き、悪戯がバレたような顔をし、必死に弁明した。

「見舞いに来ただけだよ。あつ、見舞いの品を下に置いたままだ。ちょっと取り入つてくる。」

彼は急いで立ち去つた。母親は私と田代が合い、礼をしながら申し訳なさそうに近寄つて來た。

「すいません。うちの子が、何かご無礼をしませんでしたか？」

彼女は首を振り、「してないですよ。お子さん可愛いですね。何歳ぐらいですか？」と尋ねた。すると母親は近くに座り、話し始めた。

「十一歳です。今小学五年生で来年受験なんですよ。私立の中学校に行きたいって言つて、私は反対というか公立でもいいじゃないって言つたんだけど、本人が絶対私立がいいって意志強く言うもんだから、でも私立はお金がかかるでしょ。経済的に余裕がないという訳じゃないんだけど、計算したら不安になつて、その事やこつちに引つ越して來ての生活の事やらでストレスで胃潰瘍になっちゃつてね。それで今入院して……」

母親は途中で口を手で被い、しまつたという顔をした。余計な話を長々としてしまつた事を謝つた。彼女は不快感を抱いてなかつたので「別にいいですよ」と笑顔で答え、「話を続けて下さい」と言った。怪訝な顔をしたが、母親は話を始めた。

「慎吾、ああつ、私の子供ね。それが目の前で血を吐いた所を見てしまつてね。勘違いしちゃつたの、私が死ぬんじゃないかなつて、それで手紙を書いてくれてね。それを読んだら愛おしくて涙が溢れて私は反省したの、今は子供の為に頑張ろうと思うわ。だつてあの子が行きたいつて行つてるんだから親の私が頑張らないといけないつて……」

母親は話をしている間、彼女は思案していた。彼との事を……結婚する事や子供を産む事、四苦八苦しながら普通の家庭を築いていく事。思案しているうちに目が潤んできた。

艶のある綺麗な長い髪、透明感のある肌、しかし体が痩せ細り、頬がこけている。美しい虹彩と茶色の瞳からは大粒の涙が流れていた。彼女は「ごめんなさい。」と謝つた。突然の事に母親は驚き、呆然としている。彼女は悲哀に満ちた感情を流し出している。鳴き声は体躯全体に響いていた。

街路樹と田園風景、所々によく分からない店が立つてゐる。それが僕達の登下校通路。交差点に入り、慶太とは別れた。彼は強引に僕にDVDを渡した。結局、葵は来なかつた。先生は体調不良と言つていたが、葵に限つては怪しいものだ。二年間皆勤賞の葵が……

「わっ！？」

急に後ろから押され、僕はよろけた。後ろを振り返ると屈託なく笑う葵がいた。

「急にびっくりするだろ。てめつか学校何で来なかつたの?」

「来なくて寂しかつた?」

「…………いいや」

冷たく言うと葵は僕の右手を掴んで「ちょっと付き合つて、返答する前に葵は僕を引っ張つて行つた。小さな体で……

心地よい快晴の陽気、吹く風に強さはなくて柔らかさがある。大樹から桜が咲き、舞い散る桜と陽光が重なり合い、美しい色彩を描く。公園にはブランコを漕ぐ男女の姿。

「引っ越しすんだ」

「そう。だから一応体調不良で休んだけど、引っ越しの手伝いで」

「何か急だな。」

「うん。父親の都合で……」

葵は引っ越しの事は言つたが、場所や理由などの詳細は教えてくれなかつた。僕も特に詮索する必要もなかつた。葵はブランコを座つて漕ぎ、僕は立ち漕ぎで勢いよく漕ぎ、前方に飛んで着地、冷水機の方へと歩いた。

「慎吾は私が引っ越しても寂しくない？」

冷水機の水を飲みながら「別に」と答えると葵は「どうして？」と聞いてきた。

「だつて死ぬ訳じゃないし、葵が携帯持てばどうにか会えるでしょ、」

この言葉に葵の表情暗く曇った。その様相は水を飲んでいた僕も気づいた。

「どうしたの？」

彼女は首を横に振り、「何でもない……」と黙つて、話題を変えた。

「やついえばね。」この公園、取り壊されて病院になるんだつてさ、「

「マジで！？」

「うん。一週間後ぐらいで工事が始まるって、」

「……なんかショックだな。」

「私より、公園が大事なんですね」と嫌みたつぷりに葵は言い、僕はそれをさらりとかわし、「そうだな」と答えた。葵は微妙な表情を覗かせ、感情を飲み込み、悠然に話しだした。

「私ね、よくこの公園で弟と遊んでたんだよね。だから……すい寂寞しいよ……」

「……葵つて、弟いたんだ。何歳違い?」

「……そつか、慎吾は弟の事、知らないんだよね?」

「……何が?」

「……実はね、弟は……四年前に交通事故にあって亡くなつたの……」

「……えつー?」

明朗快活でいつも屈託なく笑い、人一倍真面目な性格で少し天然な葵には暗い過去や話題はないと勝手に思っていた。葵の育つた背景は明るく何の苦労もない平和な家庭だと想像していた。葵は申し訳なさそうな顔をした。

「何が?」めんね。私が弟の事話しちゃつたから……」

「……いや」

葵の中では過ぎ去った事なのかも知れないと葵は明るく言った。僕はいつも暗く沈黙した雰囲気を変えようと葵は明るく言った。僕はいつも声より小さく「そうだな」と頷いた。葵とはいつもテストの点数を争っていた。所々勝つ教科はあるものの、合計点数はいつも負けて

「せついえば、慎吾は結局私に学力では勝てなかつたね。」

9

いた。少しだけ回想していたらふと疑問が生まれ、意気揚々と今までの戦績を自慢気に語っている葵を遮つて口を開いた。

「葵はどうしてこの中学校に来たんだ？」

「えつ？」

「僕みたいに中学受験に失敗したなら分かるけど、なんだかそういう感じはなさそうだし、葵の成績なら私立とか、ここよりいい中学に行けるでしょ」

質問に対し葵は少し俯いて思案し、億劫そうに答えた。

「実はね、この中学校に凄く感謝している人がいて、その人の後を追つて来たの。家から近いって理由はあるけど一番はそれかな。最初はその人は別の中学に行くみたいだったから、どうしようか迷つた時期もあつたけど結局この中学校になつたからずごく良かつた。実を言うとその人に対するストーカーみたいな事してたんだ。相手にはバレなかつたけど」

「その人の事好きだつたんだ。」

葵はまた思案して「うん。そうだね。会えたんだけど告白出来なかつた。」残念そうな顔をした。

見かねた僕が「じゃあ明日言えばいいじゃん。引っ越すのって明後日ぐらいいだろ？。」

すると葵は暗く表情を崩し、悲哀に満ちた感情を表すよみうり言葉を発した。

「でも、もう意味ないんだよね……無意味なんだ……」

落胆と悲哀が混じり合う様相に僕はそんなはないと発しようとしたけど、何だか無粋な気がして口を噤んだ。体躯全体に悲哀の色を馴染ませ、瞳は潤み、小さな体がさらに小さく見えた。今にも泣き出しそうな状態に僕は口を開いた。

「転校したらそのがり勉眼鏡やめろよ。」

葵は目を丸くして僕を見つめ、怪訝そうな顔をした。僕自身何故そんな事を言つたのか自問自答している。心とは裏腹に口は開く。

「だいたい今時そんな眼鏡かける奴いねえぞ。眼鏡外して『コンタクトにすればいいじゃん。』

言葉と同時に葵の眼鏡を外した。葵は僕の突然の行動に抵抗できず、に外された。葵の様相を傍観できずに突拍子もない行動した僕に映り込んだ映像は一重の大きく澄んで吸い込まれそうな瞳の戸惑い顔の美少女だった。

（誰！？）

一瞬把握出来ず、固まつた身体から小さな手が眼鏡を奪い返して、付けた。その瞬間に状況把握した僕は率直な感想を考えもせず口にした。

「可愛いな」

「えつー!？」

言った瞬間に失言だと思った。言葉によつて今までの関係を違う形にしてしまつよつた変な感覚だつた。嫌な沈黙空間を変えたくて口を開く。

「眼鏡じやなくてコンタクトの方がいいんじやない。その方が男子からの人気が上がるぞ」

「そつ、そつかな」

互いに照れ合い、何だか氣恥ずかしい妙な状況に、髪をなびかせる程度の風が吹いた。心地よい優しい風だつた。葵も雰囲気を変えようと口を開いた。

「…………私ね、

この季節の風好きなんだ。暖かいよつて冷たくて冷たいよつて暖かいそんな春風が好きなんだ。」

早朝の教室で思案した言葉と回想出来なかつた場所、それはここだと思った。

二人は病院の屋上にいた。彼女と母親は談笑をしながら、沈んでいく夕日眺めていた。

「猫が死ぬときつて大事な飼い主には死に姿を見せないんですつて」

母親はただ頷いて彼女が話した真意や次の言葉を聞こうと顔を彼女に向けた。

「そういう終わり方つて私はありだと思うんです。やつぱり大切な人に死んでいく無惨な姿をみせたくないし、悲しくて嫌な思いをさせたくない。」

「……嫌な思いとは限らないと思つけど……」

彼女は母親の言葉を遮り、「でも嫌ですよ。自分勝手かもしないけど……」そう言つて彼女は遠くを見つめる目をした。

「……私、先生にも言われたんだ。自分勝手だつて、でも私は頑固だから……

彼には幸せになつてほしよ。普通に結婚して、父親になつて、そこに私はいなきけど……」

母親は何も言えずにいた。彼女の表情からは悲しさは見られなかつた。どこか吹つ切れつていて、美しく思えた。それでも母親は彼女の大切な人に伝えた方がいいと思案していた。

こつちに引っ越した時期、クラスに馴染めなかつた。友達と呼べる存在はいたかもしれない。ただ僕はあわせていた。悪い人達ではなかつたし、だから雰囲気を壊したくなくて、自分を出せなかつた。彼等とも中学では別々になつた。

そして入学式で葵に大声で指を差された。帰り道に葵はついて来て、その事を聞くと葵は帰り道が一緒だと言つた。事実帰り道は同じだつた。

「…………公園によつてかない？」

帰り道の途中、照れくさそうに様子を窺いながら葵は言つた。断られると半ば予期していたのだろう。察した僕は断る事が酷だと思い、「いいよ」と頷いた。

心地よい快晴の陽気と大樹の美しい桜の色彩。一人はブランコに乗つていた。

誘つたくせに何も言わない葵に僕は首を傾げ、景色を眺めた。葵は何かを話したそうにしていたが、口を開かない。沈黙が何分かした後、葵は口を開いた。

「…………私ね、

この季節の風好きなんだ。暖かいようで冷たくて冷たいようで暖かいそんな春風が好きなんだ。」

何を返せばいいのか分からぬ言葉を言い、僕は「何だそれ？」と返した。葵も自分の失言に気づいたのか笑つた。笑つて誤魔化そうとした。何故だか僕も笑い、互いに笑つている事に違和感を覚えながら、何故笑つてるか指摘した。

何だか妙な記憶だけど、頭に残つていて。

ふと葵との記憶を思い返せば、中学校生活に上手く馴染んでいたのも葵のおかげだ。葵が僕と会話してくれなかつたら多分上手くいかなかつた。

(………… そうだ。)

転校する前に感謝の気持ちを示す。伝えなくなる訳だし……

「………… 葵」

「ん？」

「何か」「ううの恥ずかしい」というかキャラじゃないといつが……

「何？」

「………… 何か今までありがとな。」

言葉を聞いた葵は少し驚いた顔したが、すぐに笑い、首を横に振り、

「………… 違うよ。感謝してるのは私の方なんだ。」

「えつ？」

「慎吾は覚えていないけど……」

葵は眼鏡を取つて僕に近づいた。その様相に困惑。やっぱり外した顔はいつもよくなれない。

「ねえ、私可愛い？」

「まつ、まあ」

葵は僕に近づいた。その刹那、何かが触れた。柔らかく少し冷たい。葵はキスをした。

固まり、把握出来ず、瞳も泳いだ。葵は離れると僕を見つめて笑つた。

「なつ、何だよ」

「顔が赤いよ。固まつてるし、」

頬は熱くなつていて、葵は笑い続ける。心拍数はいつもより高鳴つている。葵は真顔に戻り、訪ねる

「これってファーストキス？」

僕は頷くしかなく、葵は言葉を続ける。

「ずっと好きだつた。でもね……」

告白しても無意味なんだ。全然意味なんてないんだ」

葵は悲しい顔をした。でもすぐ笑つた。口は笑つていて目から大粒の涙を流す。何か言おうとすると言中を向けた。

「慎吾とて楽しかつた。出来れば一緒に居たいけど……遠くに行くし無理だね……」

私がいなくなつても元氣で暮らして。それじゃバイバイ

葵は歩き出す。その背中を追いかけようと一歩踏み出す。太陽の光が葵の背中に当たる。光は眩しく、僕は目をつむる。暗闇に包まれ、無音になり、少しずつ音が聞こえる。聞こえてくるのは誰かが話す声、息遣い、目を開くと黒い色の中に茶色がある絵、顔を上げると

黒板と教壇が見え、誰かが話していて、誰かがはしゃいでる。毎朝恒例の騒がしい教室の風景。

（なんだ……夢か……）

背筋と両腕を伸ばし、葵の席を見る。空席のままになつている。

（それにしても変な夢見た。葵とキスしかやつたし、あの時は無様だった。

つーう事は眼鏡を外した美少女の顔も夢か、葵があんな可愛い訳ないもんな。試しに一回眼鏡外さして……）

ガラガラガラ

教室の扉を開く音、担任の福田教諭が入つて来る。白のシャツに黒のパンツスタイル。何だか今日は空気が重々しい。若い女教師はいつも明るく陽気なテンションを体から発している。しかし表情が暗く、固い、そして悲痛である。いつもの軽やかな足取りではなく、一步一步重く進む。

教壇に立ち、日直が朝礼をしてH.Rが始まる。全員が着席した直後、僕は葵について担任に訪ねた。彼女は僕を凝視した。映る瞳からは一点の明るさはなく、暗さが漂つっていた。見つめていたのは本の数秒、でも僕には凄く長く感じた。担任は全員を見渡し、口を開いた。

「皆さんにお話したいことがあります。昨日、夜道の横断歩道を普通車一台が点灯もせず、一時停止の標識を無視して走ろうとしました。そこに横断歩道を渡ろうとした子供と接触しそうになり、そこにいた牧野葵さんが子供をかばい、衝突して、意識不明の重体で大病院に運ばれました。病院で懸命の処置が施されましたが、…今朝亡くなりました。」

参列した僕のクラス半分の女生徒は泣き、嘆いていた。その三分の一は葵とは険悪で嫌がらせや悪口を大声でいつたり、嫌悪感を抱いていた不良グループ、でも彼女達も悲痛な表情で参列していた。大きな斎場で黒く飾られた黒いリボンで縁取られた写真。周りにたくさんの花。お経。喪服を来た参列者。

(何だ?これ?)

「冗談でしたと僕を驚かせて、葵が登場する。全て仕掛けでスタッフが登場して全部説明する。

でも何だかそんな可能性はなさそうだ。

さつきまで対面していた。正確にいうと昨日まで慶太ともに一緒に下校した。

僕にはこの事実を信じる気持ちにはなれない。死んだと聞かされてしまうすればいいのかも分からぬ。葵の気持ちを知った僕がどうすればいいのかも分からぬんだ……

生徒の列が動き始める。前にいる慶太は泣いていた。いつもふざけあっている慶太の悲痛な表情を見ると、何だか違う一面を見た気がした。いつもの慶太じゃない気がした。御焼香の順番が近づく、棺桶に思い思いの物や手紙入れたり、泣きながら話しかける人の姿は、

何かの撮影風景に見えて、リアルに感じられない。

自分の番になり、棺桶に入つた葵の顔を見た。眼鏡は掛けていなかつた。たぶん壊れてたんだろう。

屈託なく笑つたり、躍動する氣配はなくて、冷たく真つ白で美しい。何だか僕はキスをしたくなつた。もう一度と会つことはないから……

（そうか。これで最後なんだ。何か言おう。葵に何か言おう。でも何つて言つていいか分からぬ。言葉が見つかぬ。それに、最後だつて思いたくないよ。また……会いたいよ……）

すゞしく長く葵の顔を見つめていた。異変に気づいた周りは僕に近付こうとした。でも足を止めた。

慶太は僕に同情するような悲しい顔をした。それも慶太じゃないような、僕が見た事ない顔。周囲も僕に対しても何とも言えないような悲しい顔をしていた。

……ボタツ

何かが落ちて下を向く、水滴が落ちている。頬の感触や周囲の反応を察つして、自分の異変に気づいた。

（……泣いてんだ……）

膝を落とす、肩が垂れ下がり、力が抜ける。溜まつていた感情が溢れだした。

いけない事をした。病室を抜け出してしまつた。今頃病院内は緊急

事態だらつ。でも……私は……

この場所に来たかったし、目に映したかった。もう最後だから……  
ブランコに腰掛ける。星は光り輝き、照らし出される大樹の夜桜は  
美しく綺麗だ。確かに会ったのもこんな風景だったと思う……

親と喧嘩して家出した私はこの公園に来て、ブランコに腰掛け、憂鬱にうなだれていた。

「中田さん？」

顔を向けると中学校制服を来た男子が立っていた。クラスは別で名前は知らない。どうやら塾の帰りらしい。彼は私の顔を確認していった。

「中田美希さんだよね？ そうだよね。」

彼は私に近づいてきた。不審に思う私は彼に名前を訪ねた。

「あっ、俺四組の佐野大悟、中田さん何してんの？」

普通なら軽く言葉を交わし、その場を去るのだけれど、その日はすごく愚痴を聞いてもらいたくて彼に事の経緯を話した。彼は、うん。そうだね。分かる分かる。といつような相槌を交わした。

「でもビハシよつ。家に帰りたくないし、」

「……困ったね。」

「ねえ、いくら持つてる？」

「えつー!?

私は強く田で訴えた。すると財布を出した。中には四万円入っていた。

「何でこんな持つてんのー?金持つ?」

「……小金持ちかな」

「そのお金で……ホテルに行かない?」

「えつー!?

「家に帰りたくないし、友達の所は無理っぽいし、それに何かそういう所行つてみたいし、」

「でも入れないでしょ。」

「入れなかつたらそれまでさ、でもやつてみない?」

「……家に帰れないみたいだし、しょうがないね。」

意外だつたが、仕方なくという感じで彼は納得した。あの時の私はどうかしてた。好奇心旺盛で後先を考えない。大人の今は改善されてるけど、幼少期はそれで結構失敗した。

私服だつた私と着替えさせた彼はホテルに向かう。緊張したが、彼の容姿が大人びていて、フロントのチェックも甘かつた。あつさりチェックインした。ここまで来て私は戸惑つていた。曖昧に考えていて、深くは考えていなかつた。

入室して私はベッドに腰を下ろした。すると彼は私と向き合い正座

した。私は目を丸くして、彼は真摯に見つめた。

「……実はずっと好きだったんだよね。」

不可解な状況に目を見開き、少し硬直した。

「でも……こんな形でそういう事したくないっていうか、段階があると思うんだよね。だから何回かデートとかして、美希さんが許してくれたらそういう事……だから今日はなしという事で」

純粹で真っ直ぐな言動を不釣り合いなラブホテルで堂々とやつている。そんな古風で清廉な彼が可笑しかった。私は思わず笑った。彼は恥ずかしそうな後悔しているような表情を浮かべていた。

結局その日は何もなかつた。でも時が経ち、愛し合つた。

彼とのデートではこの公園によく来ていた。それだけ思い入れが深く、大切な場所だった。彼が社会人になつてからも一人暮らしでお金がなくて公園によく来ていた。お金がない癖に私が出そうとすると怒つた。でもそんな彼も好きだつた……

そろそろ帰ろう。みんな心配しているから、ここに来れて良かつた。そして彼に会えて良かつた。

大樹に抱きついて黙祷した。彼との温もりや愛した記憶を吸い取つて欲しかつた。そしたら悲痛な感情は生まれない。ただ黙つて死んでいけるのに……

大樹に彼の幸せを願う。私の事を忘れて、愛する人と子供を連れて笑い合う姿を想像し、叶う事を願う。光景を見られないのは切ないけど……

目を開けて、大樹から離れる。春風が触れる。私は踵を返し、歩き出す。

最後に振り返り、口を開ける。明朗な普段の私で

「バイバイ」

重々しい感情は爽快な心模様に変わった。

あれから一週間が過ぎた。慟哭を映し出した僕の姿に周囲は優しく接していた。担任も同級生も慶太も、心遣いは嬉しいけど僕は気をつかい、平気なフリをした。

学校にはカウンセラーが来て、クラスのメンタルケアをしていた。確か名前は山崎という名前だった。彼と話した内容は愉快だった。

「澤村つていたよな？」

教師達とはかけ離れた話し方、僕が頷くと彼は嫌悪感たっぷりの表情で言う。

「俺、アイツ嫌い」

同級生、もしくは下級生みたいな様相を表す彼、澤村は素行の悪い不良生徒で評判は良くない。

でも大人がこんな事を言うと思えなかつた。教師達は絶対に言わない。そんな彼に対し、口を開く。

「僕も嫌いです。」

いつも彼は一切気などつかわず、葵の事にも触れず、僕に話のテーマを作らせ、彼は思案して話し出す。意気揚々と話す彼との共有時間は素直に楽しかった。ありのままの自分でいられた。

教室にあつた葵の席は配慮により片付けてある。僕には妙な既視感みたいなものがある。棺桶に入った葵の顔と眼鏡を外した顔に対して……

葵が亡くなつたのに、考へているのは葵の事だ。まだ僕は葵が教室に屈託のない笑顔で入つてくるような気がする。

まだ……信じたくない……

下校時間、慶太が一緒に帰ろうと誘つたが、学校に用事があると嘘をついた。

放課後の教室のグラウンドでは部活動の生徒が右往左往している。人が死んでも日常は進む、傷心があろうとも社会は進む、そうすると自分が取り残された気持ちになる。世界でたつた一人取り残された気がする。僕は教室を出て、校内を出た。

快晴の心地良い陽気、春風が吹き、桜が舞い散る。周囲を見渡す、だけど誰もいない……

公園が見えると工事中の看板、機材の騒がしい音と忙しそうに働く人々。

（取り壊されるのか……）

傍観していた。でも何かが壊れる音がして、心が大きく揺れて、壊される事に不快感と嫌悪感が押し寄せた。一緒に過ごした葵との記憶。屈託なく笑い、僕も笑っていた。あの風景がなくなる……

「やめろよー。」

開口し、叫んでいた。おかしな行動だと思った。でも勝手に動いていたんだ。

「壊すな……壊すなよー。」

目からは大粒の涙が零れていた。整理されない感情が溢れて、何度も叫んで、途中から声にならない奇声になっていた。そこに一人の男性が走ってきた。

「ちよっと、話できるかな？」

無言で俯いていた。けど彼は現場監督の方に話して、僕に手で場所を示して移動させた。

地べたに互いに座り、彼は少し時間を置いて話しかけてきた。

「落ち着いた？」

頷くと彼は微笑を浮かべた。爽やかな白い歯と穏やかな彼は工事現場には不釣り合いに僕は見えた。

「何があつたかわからぬけど、工事を止める事は出来ないんだ。君の年齢だとまだ難しいと思うから端的に言うと大人の色んなものが重なりあつていてるから不可能という訳。残念だけど仕方がない。」

彼は僕の方を向きながら丁寧に説明していた。その姿を見ると異論や反論をできなかつた。

「それにね。ここは僕にとつても大切な場所なんだ……」

初恋の人と一緒に過ごした時間がたくさん詰まつて大事な場所。「

僕は目を見開いて彼に視線を向けた。視線に対し顔向きや表情を崩さず、話し続ける。

「彼女とは長い間付き合つてた。だけど別れた……彼女は重い病にかかるつて余命が長くない事を知つていて、僕に隠して関係を断ち切つた。彼女の死に気づいたのは別れてから三年後、彼女は自分の死を近親者に僕には隠してほしいと伝えていた。彼女の母親が僕に伝えてくれた。僕が結婚する事を聞きつけた母親は話さずにはいられなかつたと、彼女は僕の幸せを願つていたから……死の淵までずっと……」

彼の言葉は穏やかであるが、切なさを縁取つていた。

「でも自分勝手だよな。大切な人に教えないなんてさ」

明るそうに言つていたが、目は潤んでいた。悲痛な心境は察した。

「僕の妻は今妊娠してて、もうすぐ生まれそうなんだ。女の子らしい。だから初恋の人の名前をつけようと思うんだ。美希つていう名前を……」

どうやら彼女は僕等三人でこの公園に来る事を望んでいた。でもそれは叶わない……」

僕は何も言えずにいた。彼の辛い立場を理解したし、気持ちもわかつたから、彼は言葉を続ける。

「時の経過とともに消失や変化をしてしまう事は仕方がない事なんだ。

それは誰も止めることができない流れなんだ。でも…

彼は顔を少し近づけて僕に訪ねた。「くそい台詞言つていい?」僕は頷くしかなかつた。

「例え場所がなくなつても忘れなければいい……

大切な人と過ごした場所ならば記憶に留めて置けばいい、色あせず美しいま…

なくなつても過ごした時間がなくなる訳じやない。なくなつてしまふのは忘れ去られてしまつ事、記憶に残つていれば、存在を証明している……

大切なのは記憶に留め、伝えること…

人に伝えるんだ。よくここで遊んだことを大樹の桜は絶世の美しさだつてことを他人でも友達でも大切な人でも…

そしたらきっと消えない。消えることはなく永遠に存在し続ける…

… そう……思わないかい?」

彼は微笑を浮かべた。見ず知らずの男性の言葉に僕は納得して感動した。それだけ彼の言葉にはいろんなものが詰まつていて、素敵だつた。彼の言葉とともに僕は記憶を思い出していた。約四年前の事

…

母が吐血して倒れた。僕はどうにか冷静に救急車を呼んだ。死ぬんじゃないかと思つたが、胃潰瘍という診断結果。それを早く伝えてくれれば、入院中に母への手紙を書かずにはんだのに…

無意味になつた手紙を見舞いの帰り道に手でブラブラさせながら自宅へと歩いていた。風が吹き、手紙が飛んだ。ヒラヒラと舞い、ゆっくりと手紙は飛んでゆく。やがてそれは公園のブランコに悲痛な表情をして座る一人の少女の膝上に落ちた。少女は手紙を手にとり、

読み始めた。

## 手紙

普段は照れくさくて言動では表せないけど、本当は感謝しています。あなたがいる事で笑えたり出来る事や楽しく過ごせる事。でも時はケンカしたりする事もあります。でも大切な人だからケンカもできたりします。

あなたといた時間がどれほど大切だったかは、いなくなつて初めて気づくのかもしれません。

あなたといた時間を僕は忘れません。あなたがいなくなつても絶対忘れません。僕がいる意味はあなたがいるからです。だから一生懸命生きたい。明るく元気で生きていきたい。あなたからもらったものはそれだけ大切なものだつたと証明したいから、僕は前を向いて歩いて生きたい。

あなたが大好きだから。

手紙は小説の文章の一部を抜粋し、僕なりに要約して書いた稚拙な文章である。僕は手紙が飛んでいった方向に歩き出した。

歩いて行くとブランコに座る少女が手紙を見て泣いていて、光景に目を丸くした。近くで見ると美しくて、恍惚感を抱いていた。彼女は僕に気づき、涙を拭い、聞いた。

「これ、君が書いたの？」

声が出せず、僕はただ頷いた。

「いい手紙だね……」

少女が誓めてくれた事に何も言えず、黙ってしまった。少し沈黙して少女が話し出す。

「今日ね。私の大切な人が交通事故で亡くなつたの……」

私その時に現場にいたんだけど、すごく怖くて何も出来なかつた。大人の人が救急車呼んでくれて、病院に運ばれたけど、今日亡くなつた。私、何も出来なかつた……

でもこの手紙見てさ、元気になれた。私が一生懸命生きようと思えた。一樹の分まで……

もし今度、同じ場面になつたら、助けてあげられるよう……強くならなきやつて……」

悲しい面持ちだけど、前向きに進もうとしている少女。

ポケットをあさくり、僕は少女に近づき、ハンカチを渡した。少女は「ありがとう」とい、ハンカチを受け取つた。僕が手紙を示すと少女は手紙を渡した。僕はそのまま去ろうとした。どうしていいか分からなかつたからだ。

「待つて、名前だけ教えて？」

振り返り、名前を言った。大樹の桜が揺れ、春風が吹き、舞い散る。太陽が当たり、大樹に美しい色彩を映し出す。光は少女にも当たり、美しく綺麗な顔を瞳に映す。それは夢でみた眼鏡を外した少女の顔。僕の好きな女性。

葵が亡くなつてから一年が過ぎた。

僕は高校生になり、公園があつた場所には小さな病院が立ち、優しそうおばあちゃんが挨拶し、僕達も挨拶する。隣には友達以上恋人未満の同級生が自転車を押している。

吐息をつき、僕は病院に指を差して開口する

「ここに公園があつた事知ってる?」

「……知らない。私ここ初めて通つたし、」

「絶世の美しい大樹の桜があつて、ブランコに乗つてね。よく見ていたんだ。初恋の人と……」

彼女は途端に仏頂面になり、不機嫌になつた。彼女の態度に可笑しさがこみ上げ、少し笑う。それを見て彼女は睨む。また笑い、彼女の自転車に勝手に乗り、サドルの後ろを叩く。彼女は仕方のない表情で乗り、僕はペダルを踏み込む。映し出す景色のスピードが変わり、春風が僕の髪をかきあげ、彼女の髪を揺らす。想起する。葵のいた風景を呼び起こし、感慨に浸る。もう悲しさはない。

愛する人は違うけど、春が来ると葵の事を思い出す。彼女といた風景も、きっと僕は春が来ると思いつつだ。そして頭に残る葵の言葉。

「…………私ね、

この季節の風好きなんだ。暖かいようで冷たくて冷たいようで暖かいそんな春風が好きなんだ。」

言葉を反芻して、目を瞑る。また風が吹いて、  
して反芻した言葉に対しても僕は答える。  
僕は目を開ける。そ

そんな春風が僕も好き。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5804c/>

---

春風

2011年6月26日04時52分発行